

## 「東京国際映画祭」でフィリピン映画を見る

為我井 輝忠

10月から11月にかけて1か月半ほどフィリピンから日本に一時帰国した。この間に東京・六本木ヒルズで開催(10/22～10/31)された「東京国際映画祭」に出かけてみた。今年で28回目の開催になり、当初はあまり外国ではその存在を知らなかったが、最近ではカンヌ映画祭やベルリン映画祭、ベネチア映画祭などと肩を並べるほど大きな映画祭となり、参加国がかなりの数になった。

今年は「#02 熱風フィリピン(#02 The Heat of Philippine Cinema)」という特集が生まれ、フィリピンの映画が10本上映された。これまで日本でフィリピン映画はあまり上映されることもなく、ほとんど見る機会もなかったので、大いに興味を覚え、時間を見つけて10本中何とか4本の映画を見ることが出来た。

今回見た作品は以下の通りである(後の括弧内は制作年と監督名を示す)。

### 1.「サービス (Servis)」(2008年、

「東京国際映画祭」の参加作品が一堂に展示されているが、これはそのほんの一部



映画祭の公式ポスター



「インビジュブル」の公式ポスター



「畏(わな)～被災地に生きる」の監督と出演俳優のフリオ・ディアス

Brillante Ma Mendoza/ブリランテ・メンドーサ)

大都会の片隅でポルノ映画館を営する一家を中心に、館内を「ハッテン場」として利用するゲイたちや暗がり盗みを働く泥棒など、都市の暗闇で生きる人々を描く。カンヌ映画祭2008年コンペに出品した。

### 2.「畏(わな)～被災地に生きる (Taklub)」(2015年、Brillante Ma Mendoza/ブリランテ・メンドーサ)

2013年11月、巨大台風ヨランダがフィリピンを直撃し、大災害をもたらした。被災地に



「東京国際映画祭」の参加作品が一堂に展示されているが、これはそのほんの一部

生きる人々に寄り添い、人間の尊厳を問う作品。2015年カンヌ映画祭「ある視点」部門スペシャル・メンション。

### 3.「インビジブル (Invisible)」(2015年、Lawrence Fajardo/ローレンス・ファハルド)

真冬の福岡と旭川でロケを敢行し、日本に滞在している4人のフィリピン男女(日本人と結婚したリンダ、不法滞在労働者のベンジー、ホストのマヌエル、建設現場作業員ロデル)の姿を描く。日本人社会が全く知らない、彼らの日本での生活を暴いたとも言える作品である。シナグマニラ国際映画祭でグランプリを獲得する。

### 4.「バロットの大地 (Balut Country)」(2015年、Paul Sta. Ana/ポール・サンタ・アナ)

亡き父の遺言で広大なアヒル農場を相続することになった息子は、売却するつもりで農場を訪れた。これまで都会でミュージシャンとして気ままな生活を送ってきた彼が、田舎の広大な大地に心が揺さぶられ、ついに父親の農場を継ぐ決心する。この映画では都会人と田舎の人との対比を通して、都会と田舎のどちらに価値を見出すかというようなことを表現したかったのだろうか。タイトルの「バロット」というのは、アヒルの孵化寸前の卵を茹でたもので、フィリピン人の大好物ともいえる食べ物である。



「バロットの大地」の監督と主演俳優のロッコ・ナシノ(中央)

どの映画も現代フィリピンの現状を伝える作品ばかりで、大いに興味を覚えた。

この4本以外にも、ブリランテ・メンドーサ監督の作品がさらに2本、インディーズの先駆者ギドラット・タヒミック、ポール・ソリアーノとイシュマエル・ベルナル等これまで知らなかった新進気鋭のフィリピン映画人が続々と登場し、大いに興味を覚えた。

どういう訳かこれまでこうした作品をフィリピンで見ることは全くなかった。一般映画館で上映されることは恐らくないのではないだろうか。「インビジブル」のような社会派映画というような作品はシナグマニラ国際映画祭のような場でのみ発表されるのかも知れない。